

# 私の幼児教育論(一)



## 子どもの生活をみつめて考えてきたこと

学生時代から、私は子どものいる所を訪ねるのが好きだった。目的もなく行く時もあるが、先輩の仕事の手伝いで行くときもあり、自分の資料を得るための時もあった。行先も様々であったが、その一つにろう学校があった。初めて訪れたのは十五年も前であろうか。早期教育の先がけをなして、そのろう学校の幼稚部は三歳クラスを設けたばかりであった。耳の悪い子どもらの幼稚部での生活にふれての印象は、こういう幼児教育もあるのだなという驚きであった。耳が聞えない→言語の自然習得ができない→特別な人工的な言語構築法をとらねばならない、というわけで、幼児から言語指導のカリキュラムに従って組織的な指導が行われる。それは子どもの自由な行動の制限から始まる。五、六人のクラスだが、視覚に頼る指導だから、常に先生の方に向けて坐

清水 美智子

ることが要求される。先生の用意した教材が出されて、多少のハプニングはあっても、先生の予定した手順ですすめられていく。その時々には教えたいと意図することはや概念があつて、それらを反復練習させる。微妙な文型の使い分けを限られた教材だけでその時正しくいえるまでやらせる。絵カードを使つてもその名を教え、それらを分類させて上位概念を表わす語を教えていく。教えたいことがわかっているかどうかを絶えず確認しながら進められる。先生の要求通りの答えが出るか出ないかで、ヨロシイ、ダメの評価が与えられる。子どもは先生の評価をたえずうかがいながら反応する。文字の導入は早く、日記を書く指導にも力が注がれている。

もちろん、学生であつた私には、簡単に指導法の適否を問題にする気はなかつた。ただし、聞こえないということが、こんなにも幼児期の生活経験を変えざるを得ないのかという驚きがあつた。それと同時に、このようなタイプの経験を中心に幼児期を

すごしていく時、子どもらはどのようなものを感じ方、考え方、行動のしかたを学ぶのだろうか、このような経験の総体から子どもらは何を学びとっていくのだろうかと考えた。聞こえないという障害の影響と、幼児期の生活経験のちがいがもたらす影響と、この両面から考えていかないうちの児の理解を誤ってしまうのではないか。学童期以降の、とくに九、十歳以降のう児の心理的抽象的思考の困難さ、思考の硬さ、自己中心的性格傾向などが問題にされているのを知るにつけても、私は発達を実現させていく中味としての経験に興味をもつようになっていった。

その後、私は縁あって短大の保育科に勤務し、幼児の生活により深いかかわりをもつことになった。昭和三十七年の当時、幼稚園の先生という職は不人気のように、家政科に比べて保育科を受験する学生は少なかった。私立短大協会の集まりでは、女子高校生に保育科のPRをしようという相談があったことを覚えていた。だが、それから四、五年のうちに、いつのまにか保育科に光があたるように変わっていった。幼児教育振興の声が、政財界からあがってきたことに支えられていた。短大の幼児教育科が急にふえ、あちこちの幼稚園が増改築をはじめた。都市郊外の人口増が激しくなり、学生時代に行ったことのある古い小規模の園が、七百人の園児を擁する、立派な鉄筋二階建ての園舎をもつよう

に変わったのを見て驚いたりしたものである。このような外側の変化、発展ぶりに目をうばわれているうちに、ときに保育内容そのものにも変化が生じていることに気づき始めた。その保育の印象は、不思議なことに、「まるでう学校の幼稚部のようだ」という感じであった。もちろん耳はきこえているし人数も多いから、ちがった雰囲気もある。しかし何か似ている。何故だろうか？何がこの現象をうみ出してきているのか、そのときからずっと私は考えつづけている。

先生の指示に従って、どの子どもも同じことをやっていく。先生は一つ一つ確認しながら次にやるべきことを指示する。どんぐりを使って、「数の分解と合成」の指導が行われているところに出くわした。四十分の間に、どんぐりだけを教材にして、出した入れたり離したり、くつつけたりの単調な作業を指示道りに行う。子どもたちは各々、自分の前の僅かな机上の空間だけを使う。となりの子ども向いの子どもも同じことをする。いや、同じことをするように要求されている。最後にワークブックのそれに相当するページのいくつかのふうせんに色をぬり切り抜いて、今やってきたようないくつかの並べ方の通りにのりづけさせて終った。子どもたちは、どんぐりあそびをしながらのしく数の知識の学習をしたということだった。

しかし私は、この子たちがそのとき、自分の頭も心も十分に使っていないということを見抜いてしまった。子どもの精神の沈滞を感じとってしまった。一体、あの驚きと発見と探求を求めていく子どものエネルギーはどこにいつてしまっているのか。私の教え子のある幼稚園の先生が訪ねてきたとき、「先生あそばしてーな」といつてくる子どもたちを抑えて、ワークブックをこなしていかなければならないのは苦痛です」と話してくれたのを思い出す。やっぱり成長を志向する子どものエネルギーは閉じこめられているのだ。ワークブックの一ページは出来上がった。けれども子どもは、新しい関係を発見し未知の世界にふみこんだ知的興奮を示してはいない。子どもはその場で自分を生かしていないと私は見る。たとえ知識を得たとしても、それは素朴な感動と切りはなされた、ひからびたものにすぎないだろう。それは知識の量を少しはふやすかもしれないが、考えることのたのしさを知っていききっかけにはならないし、思考力を育てていく糧にもならないだろう。

そんな見方は主観的だと反論する人がいるかもしれない。客観的にみたらならば、子どもは数に関する正しい知識を確かに得たのだというかもしれない。だがしかし、もし感じるとか感動するとか、知的興奮をおぼえるといった心の働きを、主観的だという理

由で正当にみとめないならば、客観的にものをみるとは無感動に生きることになる。それは自分の心で見ること否定する、従って人間らしくあることを否定することになるではないか。これこそ人間疎外の思想の元祖だといえるだろう。私たち人間はもっとも人間的な心の働きを自らが不当に軽んじ切り捨ててきた営為の結果、今や自己疎外・自己喪失に陥りかけているようである。無気力・無感動な人間がふえてきた、遊べない子がふえてきた、という各種現場からの声を少し前から耳にするようになったが、私には象徴的である。

保育の科学化・現代化のかけ声で、新しい保育の動きがひろがっていくのをみながら、私は考えてしまう。保育の科学化・現代化とは、何とあいまいでひびきのよいことばだろう。あいまいなままに、目新しいことばの魔術にひっかかってしまつて、ことばが何をあらわしているのか疑問をもつて緻密に考えていくこともしなくなる。私には、この態度がとも非科学的な思考の典型のように思われるのである。第二次大戦中、国民学校の児童だった私は、鬼畜米英、神国日本……等といったことばにいくるめられて、素朴な疑問を押し殺していた苦い経験から、私はひびきのいいことばを鵜呑みに出来ない習性を身につけている。自分の感覚がとらえていた素朴なものの方が真実だったという経験から、私にはひ

とつ信念ができている。自分が事実をみて何かしっくりこない不自然さを感じた時、素朴な疑問がでてくるとき、私はそれにこだわりつづけた。納得のいくまで考えつづけた。

保育の何を科学化しようとするのか、何故科学化する必要があるのか、何のためにするのか、具体的にはどうすることが科学化なのか、科学ということはをどんなイメージで使っているのか、そもそも科学とはどういう性格をもつものなのか……現代化についても同じように疑問がわいてくる。私は自分のとらえた疑問をいろいろの面から考えつづけてきた。現実の子どもの姿、保育者と子どもとの関係のあらわれをみて、自分の子どもとのかかわりを深める中で、自分もその中で生きている現代の社会・文化の状況をみつめて、また諸分野のすぐれた研究者の業績や思想を学んで、自分の想像力を駆使して、自分の疑問を解こうとつとめてきた。すると、どちらの方向から究めていっても同じ問題点がかうかび上ってくることに気づく。この小論でも、光のあて方をいろいろ変えながら、私の考えをすすめていこう。

一つに、「科学的に正しい知識を教えていく」とか「科学的な正しい教え方」という強い姿勢の中には、現時点における知識や科学の到達水準を絶対に正しいものとして絶対化する見方がある。けれども私の考察では、科学それ自体が歴史的に発展してい

く性質のものであり、その史的発展過程の一時期の姿として現代の科学をみるという相対的なとらえ方が欠けていることに気づく。歴史の流れをとめてしまつて、現時点における科学技術や知識を科学研究の最高にして最終の成果の如く絶対化し、固定してしまふ思いこみの思想を、真にすぐれた科学者ははっきり批判している。実際ある時期、ある面からみて正しい、有益だと思ひこんでいた科学技術や知識が、その後の研究の進展に伴つて否定されたり、致命的なマイナスの作用が明らかになった事實は、文史上にもまた今日の社会の身近な例としても数多く見出せる。また人間の歴史をひもとく時、近代科学の成立はごく新しい時期のことであることもわかる。近代科学の成立以前にも、ずっと古くから人間はすぐれた叡智をもっていたことに気づく。たとえば、法隆寺の境内に立つとき、あるいは唐招提寺の金堂と対峙するとき、私は静かな感動とともに古人の知恵に思いをはせる。一千年以上も前の人々の叡智の結晶をまのあたりにするとき、合理的で正確な知識に裏づけられた精巧な技術と美意識を見事に融合させ得る古代文化の水準の高さに心うたれる。

一つの事實は、いろいろの角度から光をあててみていく時、また時間の経過をふんで始めてその本質がかび上ってくる。このような相対的な見方をとらずに、現在の科学・学問の成果を絶対

化し、評価も定まっていけないのに、新しいものこそ最高だとしていくような教育の科学化・現代化は、大変不遜な生体実験ではないだろうか。正当な理由も見出せないのに、ただ新しいからというだけでやるような生体実験が許されているのだろうか。医学における生体実験にはきびしい批判の眼が向けられているが、医者とちがって教育は、その結果を直ちにそして一義的に評価できない。短時間に直線的に因果関係をおさえることができないがゆえに、子どもの人権を無視した生体実験まがいのことが堂々とまかり通っているのではないか。私は、自分の研究の対象となってくれた多くの子どもたちへの恩義からも、子どもに代ってこのことを告発せねばならない責任を感じてしまうのである。

### 知育の根本課題は何か——発達心理学的観点

思考・認識能力の発達過程を研究してきた私の視野からみると、知育の根本課題は、いかにして正しい知識を、いかに多く、いかに早く教えるかということではなく、いかにして認識能力を高めていくか、いかにすれば思考過程が発展していくか、真に主体的に考える人間が育つには、いかなる経験の過程が必要かということなのである。現時点の人間がもっている知識を絶対化する

ことはできない以上、私たちは後の世代が「世界」をより広く深く認識していく能力、一つの枠組に固定せず柔軟に思考をすすめていけるような人間の資質を高めていくことを重要な課題としなければならぬだろう。実際、社会は常に動いている歴史の流れの中にある。前の世代が遭遇しなかったような新しい事態にぶつかり、生きぬいていかねばならない後の世代を育てる視点を現時点に限ることは愚かである。私たちが、現在の科学が到達しているレベルの知識を、早く正確にたくさん教える式の教育が重要だとは思われない。未知の世界に立ち向っていくエネルギーと探求心、とらわれなく多面的にみることで、考えをいろいろに発展させていくことのできる柔軟な思考の態度を育てていく過程こそ、幼い時から一貫して重視されるべきだと、私は考える。

おもしろいことに、このような人間の、子どもからおとなへの思考の発展は、私が一つの問題をとらえ考えをすすめていく過程と重なっているようである。少くとも、私の一連の思考過程において使われる認識活動は、子どもが順次獲得していく異なるタイプの認識をすべて含んでいることに気づく。

たとえば、この小論の始めにとりあげたように、私は現実に関連したある状況から、全体的印象として何かを感じとる。もちろん、それ以前の諸々の経験に支えられてであるが、漠然とした疑

問や興味をもち始める（融合的全体の知覚、直観的認識）。その興味を追求して私はいろいろの知的探索活動を行っていく。行動的にまた思索的に。意図的に半ば組織的に経験を求めていく。しかしまた問題意識（興味）をもっていることによって、日常生活の偶然経験、非意図的な経験が思索を深めることもある。人との対話によって、読書経験によって、直接経験の域をこえて想像をめぐらして経験を広げ深めていく。また思いがけない過去の経験から大きなヒントを得ることもある。もちろんまだはつきりと言語的に整理できないモヤモヤした一連の動きをとらえているような段階である（前概念的、イメージ的、動作的認識）。こうした諸経験の幅を広げ蓄積し、異質のものから学びとっているうちに機が熟し、混沌の中から次第に何かがうかびあがってくる——あるとき洞察がおこって事がらの本質がつかめる。はじめに直観的にとらえていたことの全体の関係構造がみえてくる。こうなるとはじめて、自分のことばで整理し、一貫した論理で説明できる（概念化、構造化、言語的論理的認識）。もちろん、一つのことば

わかってくるということは、同時に新しい疑問や興味が続々と芽生えてくることでもあり、かくてあくことなき知的探求がつづくわけである。このように、私たちが明快な言語的論理的認識に至るまでには、言語化できない動作、イメージ的な認識活動、前概

念的な水準における認識活動が、自由闊達に展開される長い過程が必要なのであり、それは一見、無駄ともみえるような、多様な異質の幅広い経験をもちこつことによって可能になる。そしてこれらの諸経験を導いていくのは積極的関心であり直観であり、想像活動なのである。

右に述べたような思考過程（知的生産過程）の展開は、決して私ひとりの特殊な内省報告ではなく、広い分野にわたるもつと優れた人々がすぐれた業績をうむ創造的な思考過程を語られている際に、普遍的に認められる。私にとって興味深いのは、こういう思考過程の展開が、実は子どもが十分に言語的認識の可能な水準に至るまでの思考の発達過程の再体験に近いということなのだ。発達心理学的知見によれば、人間の個体発生において、言語的論理的認識の出現は最もおそく、七、八歳以降、より高度には十一、二歳以降であること、そしてそれはこれに至るまでの長い道のりにおいて獲得され展開されてきた具体的動作的認識、前概念的水準の認識経験を土台にして、はじめて可能になる性質のものであることが明らかにされている。

### 育ちに必要な成熟時間

幼い子どもは先ず感覚的に動作的に少しずつ自分と自分の囲りの世界を知っていく。毎日くり返される変化を含んだ経験から自分と自分の囲りの世界との関係を認知していく。歩行が自由になると独立の行動世界が拡大してくる。更に家庭内の生活に加えて家庭外の生活が拡がり、母子の関係に加えて仲間との関係が拡がって、行動的具体的にかかわる世界が多様化し、異質の経験が輻輳してくる。このような生活経験の多様化の中から新しい興味がうまれたり、変化する現象や矛盾する事実に気づき、自分のやり方を変えてみたり、新しい関係を発見したり、もっと深い知識を求めてくるといった探求心にみちた内面的活動を不断に行っていく。既習の知識が少いからこそ、既製の概念にしばられず自由にもものとの関係をつくり出したり、現実をとり入れながら現実を超えて、自由な想像の世界を構築していくことができる。童心を失ったおとなからみれば非論理的で無駄のようにみえたり、正しいか否かという基準をもってくれば否定されてしまうが、現実をつくりかえ発展させていくことのできる創造的思考の芽がそこにある。このように未だかたまたらず、興味のおもむくままに自由イメージを拡げ、経験を求め蓄積していく過程は、個人の思考の発達に必要な「成熟時間」なのだと思ふ。探求や発見や創造には、喜びがあり感動があり快い知的興奮があるという意味

で、この「成熟時間」はまた、人生を生き抜いていくのに必要なプラスの情緒を育んでいく貴重な時でもある。

自然界のすべての生物には、それぞれに固有の成熟時間がある。小さな庭で様々の植物を育てている。その事が実感として伝わってくる。季節の移り変わりと自然界の変化を注意深く観察していると、やはりそのことに気づく。人間も自然界の一構成員である。けれども人間は科学技術を駆使して自然の営みに手を加え、人間の都合に合わせて成長を促進させたり遅らせたりするようになった。さらに時間を短縮して既格品を効率第一に生産していく工業の論理が支配的になってきた近年の文明状況が背景にあって、人間の「成熟時間」をも短縮しよう、短縮できるという方向に考えが及んできた。成長過程の経験の無駄を排し、合理的に精選して科学的に正しい知識を正しい方法で教えていくという考えで、教育の科学化・現代化が推進されてきた。しかし私は、すでに科学の性格を考察して、現時点での科学の知識を、従って現代文明を絶対化することはできないことを指摘した。さらに「無駄」にみえるような言語化以前の混沌とした諸経験を通しての認識活動が、ほとんどは無駄なのではなく、知的生産過程において必須の認識活動であることを論証しようとした。いわば「無用の用」を認める思想を提示しようとした。子どもの認識機能の発達

の過程を短縮して、早く言語的概念的に整理された理論を得させようとするならば、それは単に断片的な表面的な知識をふやすだけでなく、自ら知識を求めていく能動性、子ども自身が新しい場へのぞんで自由に主体的に考えていく能力の発達を阻害してしま

### 永瀬義郎さんのこと

永瀬義郎氏は一八九一年（明治二十四年）生まれ、茨城県岩瀬町のご出身。十三歳で美術雑誌に応募して受賞されたことに始まり、十九歳の時、上野美術学校（現在の芸大）彫刻科に入学されたが、のち京都美術学校（現在の京都美大）に移られ、東京の荒木十畝塾で日本画も学ばれた。昨年六月東京で開かれた、「日本版画史を生きたる永瀬義郎のすべて展」の目録によると、「生来の放浪癖から……」とあるが、実に多彩な生活を送られて現在に至った方である。そして、北原白秋、広津和郎、日夏耿之介、長谷川潔氏らに始まる交遊の広さは、年を追うごとに広まって、永瀬義郎という方の作品ばかりではなく人間の魅力をうかがわれる。一九二九年三十八歳の時フランスに遊学、七年間パリで活躍され帰国後しばらく関西で制作活動をされた。第二次世界大戦中は中央画壇から離れて地方文化の高揚を計られ、終戦後上京されて再び版画制作に入られた。その後は当然のことのように八十四歳の現在も、かくしゃくと

うおそれがある。これからの社会で生きていくのにほんどに必要な、認識能力の発達障害をひきおこしてしまうのではないか。これでは知育偏重というよりも、真の知育ではないといえよう。

（つづく）（大阪教育大学）

して世界的に活動されている方である。

\* \* \* \* \*

私がこの永瀬さんのことを知ったのは、この版画展の紹介をテレビで見たのが初めてでした。今回幸せなことに表紙にいただくようになった。「もの想う天使」はか数点と永瀬さんご自身がご出演になったのです。私は直感的に「この方は本当に、もしかしたら子どもよりも子どもの心をもった方がいない」と羨しいまでに思いました。そしてさっそく会場に出かけてすみからすみまで、胸をワクワクさせて見せていただきました。その時お見かけた永瀬さんは白と赤の大柄のアロハを召した白髪のおじいさま（失礼）でした。一生懸命となかど話しておられたのでご遠慮して、奥さまにちょっと声をおかけしました。「本当に子どものような人です。そして元気のいいのにはこちらもかたません」と奥さまは静かにほほえみながらおっしゃいました。

こんな有名な方の作品を表紙にだけたことを心から感謝しつつ、一筆書かせていただきました。

（赤間）